



横浜銀行 ニューヨーク駐在員事務所

週間トピックス Vol. 520 (2021. 1. 29)

<今週のトピックス>

世界最先端のマスクと空飛ぶ車

映画ブレイドランナーやバックトゥザフューチャーのスクリーンで、“空飛ぶ車”が登場したのは、もう 35 年以上も前の話になります。映画を観ていた人は、未来では、“空飛ぶ車”に乗れるのではと夢見ていたことだと思います。今回は、“空飛ぶ車”をはじめ、デジタル技術の最先端について、取り上げてみたいと思います。

早速ですが、CES というイベントをご存じでしょうか。

CES は、Consumer Electronics Show の頭文字を取ったものですが、アメリカ各地で開催される家電製品中心の見本市です。特に、毎年 1 月に、ラスベガスで開催される見本市は、世界最大級のイベントとして知られています。現在では、一般化しているプラズマテレビやブルーレイディスクなどのデジタル家電や、タブレット型端末などもこの CES のなかで世界で初めて公開されたようです。



開催地がラスベガスというリゾート地の魅力からも、例年は、全米各地からだけではなく世界各国から大勢の人々が、この CES に訪れるのですが、今年（2021 年）は、COVID-19 の影響により、全面バーチャルでの開催となりました。

主催する CTA によると、CES2021、今年のキートrendは、6 つでした。

- ①デジタルヘルス（遠隔医療、ウェアラブルなど）
- ②ロボティクスとドローン（医療ロボット、配達ドローン）
- ③ 5 G
- ④デジタルトランスフォーメーション
- ⑤自動車関連テクノロジー
- ⑥スマートシティ

【世界最先端のマスク（デジタルヘルス分野）】

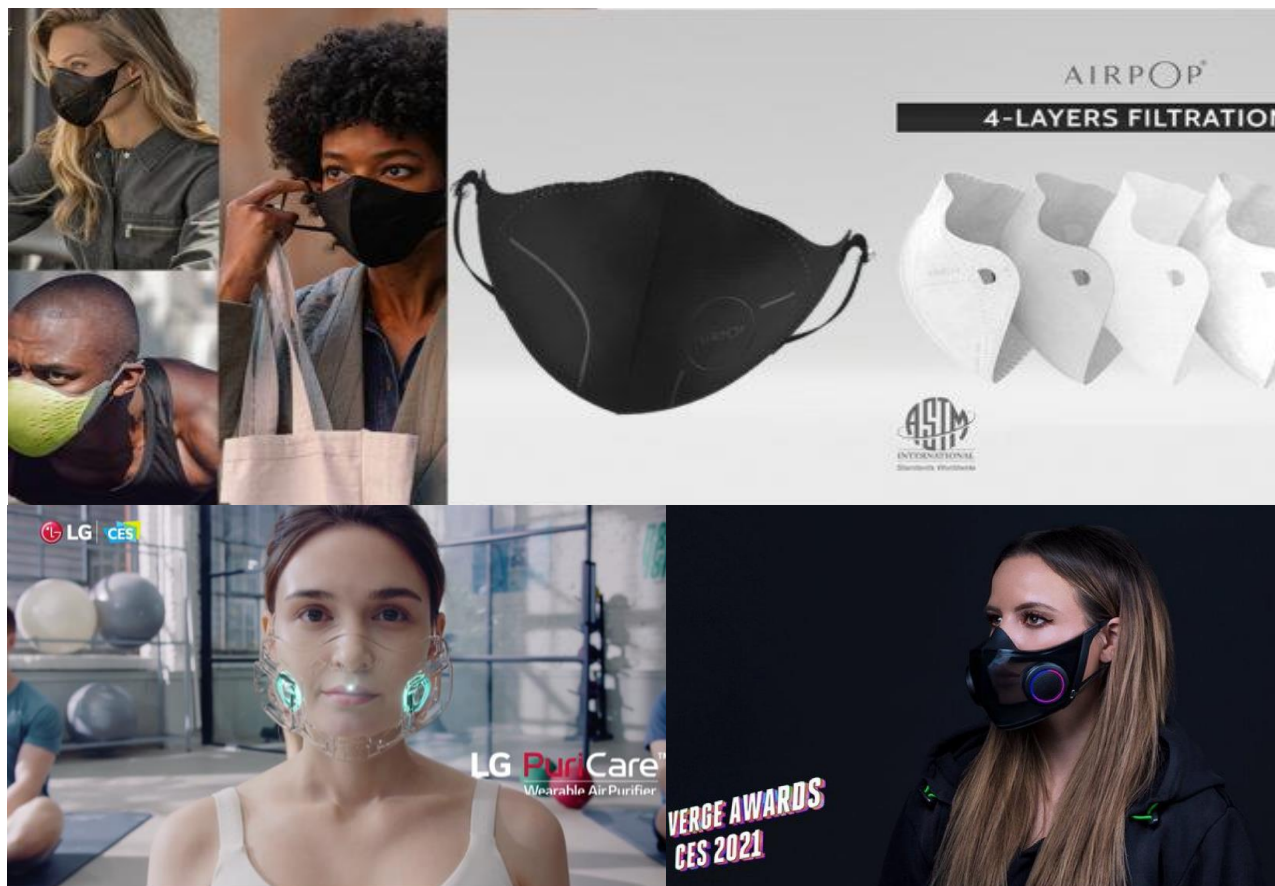
CES2021の最大の特徴は、COVID-19の影響を受けたデジタルヘルス分野の躍進であり、数多くのガジェットが出品されました。スマートフォーク、スマート歯ブラシ、スマート空気清浄機、スマートドア（デットボルト）、スマート蛇口、スマートトイレ、スマートバスタブ、スマートベッドなど。

COVID-19感染防止対策となるスマートマスクの展示が多く見られました。スマートマスクのなかでも、注目を集めたのがユーザーの呼吸データや周辺の空気データを測定する「AirPop Active+」と言われる製品です。

6年前、AirPop社の創業者であるChris Hosmer氏は、中国に住んでいたとき、彼の娘さんが有害な空気が原因で、急性の呼吸困難に陥りました。Hosmer氏は、人為的、生態学的、そして病原性の脅威、本質的なものとして、大気汚染や山火事、そして病気に対処できるマスクの構築に着手しました。

マスクの全面に統合された装置が、呼吸に関するデータ、気温や湿度をキャプチャーします。Bluetoothを通じて、スマートフォンをペアリングし、呼吸数、ブロックされた汚染物質の量、空気質指数（大気汚染の程度を示す指標）などを通知します。マスクの着用期間も分かるので、フィルターの交換時期も教えてくれるようです。

他にも、マイクとスピーカーが内蔵され、電動の内蔵ファンにより通気されるようになっているマスクや、小さな空気清浄機の機能が備わり、空気中の有害物質の最大99.95%が防止できるマスクなど、世界最先端のマスクが披露されました。



【空飛ぶ車（自動車関連テクノロジー分野）】

“空飛ぶ車”は、正式には「電動垂直離着陸型無操縦者航空機」と言い、英語では、「Electric Vertical Take-Off and Landing (eVTOL)」と呼ばれています。正式名称が長すぎるので、“空飛ぶ車”の方が呼びやすい気がします。

“空飛ぶ車”は、モビリティ分野の新たな潮流として、世界各国で開発が進んでおり、全世界で200-300件のプロジェクトがあると言われています。そのなかでも、有人試験までできたのは、わずか10件程度ようです。

日本勢としては、昨年8月、「株SkyDrive」が公開した「空飛ぶクルマ・SD-XX」は、有人飛行の公開試験を成功させており、ニュースでも大きく取り上げられていました。

CES2021で、最も話題となっていたのが、GM（ゼネラル・モーターズ）の“空飛ぶ車”でした。キャデラックのブランドのもので、上下に大きなローターが4つ装備。一人乗り仕様で、自動運転により目的地まで、空中を移動するものです。時速80キロで移動ができます。デザインコンセプトの段階ですが、見た目は、“車”というよりは“人を乗せたドローン”に近いです。



CES2021を主催するCTAのリサーチ部門のKoenig氏は、英国の経済学者の発言を引用して、以下のように述べています。

「イノベーションは、景気が後退するなかで、加速します。実際にCOVID-19により厳しい環境に置かれていたが、テクノロジーによる大きな変革が起こりました」

2021年は、どのような一年となるのか、そしてどのような形でテクノロジー革命が起こっていくのか、注目していきたいと思います。

(出所：CTA, Wall Street Journal, CNET, AirPop)

- ・本レポートは情報提供のみを目的として作成したものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。
- ・ご利用に関しては、すべてお客さま自身でご判断くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
- ・本レポートは信頼できると思われる情報に基づいて作成していますが、当行はその正確性を保証するものではありません。
- ・本レポートのご利用によりお客さまがいかなる損失、損害を受けられても当行は一切の責任を負いません。
- ・本レポートはお客さま限りでご利用くださいますようお願いいたします。